

# 閩南系漢民族の漁民社会における 「鬼」に関する予備的考察 — 「好兄弟」になる動物 —

Preliminary paper about ghosts of Chinese fishermen's society in Taiwan and  
Fukken: focusing on “*ho-hia<sup>n</sup>-ti*” become from animals

西村 一之  
NISHIMURA Kazuyuki

[Abstract] This paper is an anthropological study on the folk religion of Chinese society. A recognition of Chinese death is divided among gods, ghosts (“*kui*” in Fukkenese or Taiwanese) and ancestors. I did my anthropological fieldwork in east coast of Taiwan and coast of Fukken, China. This article is based on data of this fieldwork, especially focusing on a “*kui*” which become from animals such as sharks or whales and so on. This paper pointed out that the existence of “*kui*” in Chinese society is an existence of weak order.

【要旨】本論文は、漢民族社会の民間信仰（folk religion）に関する人類学研究である。漢民族の死後、魂は「神（gods）」「鬼 *kui*（ghosts）」「祖先（ancestors）」に分けて認識されている。そして、この3つのカテゴリーの間を動いている。台湾東海岸と中国福建沿岸にある漁村を対象に行ったフィールドワークのデータを基に、「鬼」（好兄弟）について予備的研究を行った。特に動物が「鬼」となる点に焦点を当て、閩南系漢民族の漁民社会における「好兄弟」という存在は、秩序性が希薄な存在であることを指摘した。

## はじめに—

中国南東沿岸部、台湾、八重山は、東シナ海でつながっている。これらの地域に暮らす人々は、海を通して行き来をし、また海を生業の場としても来た。20世紀以降、国民国家の成立に伴い、この海域にも国境が現れるが、その状態は国際関係の状況に大きく左右された。西村（2017）で記したように、台湾と八重山の間では戦前より両地域の漁民による往来と漁場の利用が行われ、それは戦後も継続していた。彼らは国境がある境域となった海でつながったりへだてられたりして生きてきたのである。台湾東海岸の漁民社会には、この時の移動によってもたらされたと考えられる漁撈に関連する習俗が認められる。沖縄漁民と共に船に乗った際に、彼らから台湾漁民に伝わった呪的な知識については、かつて西村（2003）で紹介した。

また、台湾と中国南東部の間でも、同じように漁民の往来と重なる漁場の利用があった。台湾に暮らす漢民族の多くは、16世紀以降中国福建から来た移民の子孫である。特に、清国に抵抗する鄭成功が、1662年にオランダ人を退けてその拠点台湾本島に移したことを契機に、対岸の福建から多くの人々が台湾に渡る。しかし、1895年より日本植民統治が始まると、その往来には制

限がかかる。一方、対岸の福建漁民の台湾海峡への出漁や澎湖諸島そして基隆へ寄港しての出稼ぎ漁は、日中戦争が勃発する1937年頃まで行われていた。戦争による中断を挟み、戦後になるとその移動は再び行われる。だがしかし、中国大陸における国民党と共産党の対立の激化から、台湾海峡の往来がまた困難となる。当時、台湾海峡や台湾近海に出漁中の中国漁民が海上で国民党軍に捕まり、台湾に連れていかれ軍隊に編入されるということも起きていた。この1945年から1950年代初頭の短い間に行われた、戦後の台湾および福建漁民の移動は、当時の国共内戦の影響を強く受ける。基隆市内のある媽祖廟周辺には、海上で捉えられ国民党軍に編入されて台湾に留まらざるを得なかった漁民が多く暮らしていた。そして今、この媽祖廟は、対岸にある彼らの故郷の一つ福建省惠安県崇武鎮の媽祖廟との交流がある。1949年12月に中華民国国民党政府は台湾に撤退する。その後、1950年の浙江省舟山諸島の大陳島住民の台湾移住のような軍事的行動を伴うものはあったが、漁民たちの台湾海峡の往来は中国と台湾双方から厳しく制限される。だが中台関係の緩和を背景に、特に1990年代から2000年代初めにかけて、台湾の漁港では多くの中国人漁業出稼ぎ者が働いていた。彼らの中には福建から来るものが多かった。そして2017年現在、その姿はめっきりと減っている。

中国福建(特に閩南地域)と台湾との間には人の移動の長い歴史がある。そして、台湾には中国福建から持ち込まれた民俗文化が認められる。ここでは、それを閩南民俗と仮に置く。閩南民俗は、台湾内部においてその形を変化させつつも存在する。それは、例えば民間信仰の形で認められる。本論文では、福建南部沿海地域と台湾東海岸との間にある民間信仰の姿を入り口に、閩南系漢民族の漁民社会における靈魂観について初歩的考察を試みることを目的としている。なかでも無縁死者(=「鬼」「好兄弟」)に対するそれを対象とする。この時、特に両地域に共通する地理的特性、つまり海洋を臨む沿岸地域である点に着目する。

## I 漢民族社会における「鬼」

漢民族社会における「鬼」は、人にとって非常に身近な存在といえる。日本でいうところの幽霊として、怪異譚には欠かせない存在である。また、人に何か不可解な出来事をもたらしたり、災厄の原因となったり、あるいは良いことをもたらす存在として耳目を集めたりする。良いことの例としてしばしば語られるのが、賭博などのいわゆる賭け事の勝ち運をもたらすというエピソードがある。その御利益を感謝する人々の手によって、ある特定の「鬼」が神として祀られ、例えば有応公イウインゴン(*iu-in-kong*)として信仰を集める。有応公という名称は、「有求必応」(求めれば必ず応じる)という言葉から来たものである。この様に「鬼」は神となって、利得を願うような個人的である意味卑俗な願いを求める対象となる(林 1995)。本章では、この「鬼」について、簡単に紹介しておきたい。

### I-1 漢民族社会における靈魂観概観:「鬼」を知るために

漢民族社会において旧暦7月は、別名「鬼月」と呼ばれている。この時、あの世(「陰界」とこの世の間(「陽界」)を隔てる門が開き、あの世の靈魂がこの世に出てくるためである。旧暦7月1日は「鬼門開」、30日は「鬼門關」とされメディアで報じられることもある。また、その15日は中

元節であり、前後には靈魂に対する大小さまざまな規模の供養儀礼が各地で行われる。ここで、もう少し丁寧に説明する必要がある。旧暦7月にこの世を訪れるのは、祖先の靈魂と祖先とは見なされていない靈魂とがある。中元節の前後人々は、祖先の靈魂を供養するために日中寺に行き、並んだテーブルに供物を置いて線香を焚く。しばらくしてから供物の一つである銀紙（あの世で使う金銭）を寺の炉で燃やし、他の肉などの供物は家に持って帰る。一方、祖先ではない無縁死者の靈魂にも供養が行われる。これは、通常各家々の戸外にテーブルを置き、供物を並べて線香をあげ、しばらくしてから銀紙を焼く。一般の家だけではなく、銀行や商社といった会社、ブティックやレストランなどの商店、国や地方の行政機関、さらには研究機関でも同様の儀礼が執り行われる。また、各寺廟でも無縁の死者の靈魂に対する供養が人々の手によって行われる。これを「普渡」と呼ぶ。普渡は午後遅くから夕方にかけて行われる。普渡という言葉には、仏教でいう「普渡衆生」つまりあまねく全てがああ世へ渡ることが出来るという意味がある。

また、祖先の靈魂への祭祀は旧暦毎月1日と15日に行われ、神像と位牌が置かれた壇の前にある机に果物を供え線香が捧げられる。そして無縁死者の靈魂の祭祀も、旧暦毎月2日と16日行われる。通常は商店などの経営者や従業員が、夕方に祈りを捧げる。こうした祈りは、多少の違いはあるものの、台湾各地の漢民族社会に共通して行われる。台湾の漢民族社会では、子孫が無い無縁死者の靈魂を「好兄弟 <sup>ホーヒアティ</sup> *ho-hia<sup>n</sup>-ti*」あるいは「鬼 <sup>クイ</sup> *kui*」と呼び、恐れの対象と説明される。この「鬼」の存在にはかつてより研究者の目が向けられている。例えば日本統治下台湾の宗教について記した曾景来による『台湾宗教と迷信陋習』（1995（1939））には、「台湾の旧慣によると無縁の死霊は鬼怪（厲鬼又は鬼神）となることがある。鬼神が飢るれば必ず人々を襲い、人心に取り付き、そして種々なる危害を與へる」（曾 1995（1939）：113）とあり、無縁死者の靈魂つまり「鬼」が災厄の原因となることが説明されている。

こうした台湾漢民族社会の靈魂観について、1960年代後半に台湾南西部の農村でフィールドワークを実施したアメリカの人類学者ジョーダン（David K. Jordan）は、漢民族が靈魂を「神（gods）」「鬼（ghosts）」「祖先（ancestors）」という3つの対象に分けていると考えた。そして、靈魂はこれら3つに明確に分かれているというより、カテゴリーの間を流動的に移動するものであると指摘している（Jordan 1985）。多くの人類学者がジョーダンが行った靈魂観に対するこの整理を踏襲し研究を進めてきた。死者の靈魂が、神にも鬼にも祖先にもなるというこの考えを踏まえ、如何にして3つのカテゴリーを靈魂が揺れ動くのかが検討された（例えば三尾（1990））。人は死ぬと靈魂となり「鬼」となるが、子孫がこれを祭祀することで祖先となる。だが、何らかの理由で祖先祭祀が途絶えたり、子孫を残すこと無く死んだ場合魂は無縁死者の靈魂つまり「鬼」となってしまう。そして、「鬼」の中から人々の関心を集め靈驗を現すと見なされたものが神格化し、神として祭祀施設の中に安置され信仰されるのである。この神となった無縁死者として、有応公や萬善爺などがある。

こうした神として廟や祠を建てて祀られる無縁死者の靈魂について、先の曾景来は、「200年以來50年以前」に作られたものももっとも多く、日本が台湾を植民統治する以前既に建てられていると述べている（曾 1995（1939）：94）。これに従えば、無縁死者の靈魂を神として祀ることが、中国福建と台湾を往来した漢民族の手によって、日本統治が始まる1895年より前から既に多く行われていたようである。このような無縁死者の靈魂が神格化した場合、一般に有応公と呼ばれる

神となる。台湾の民間信仰を研究する黄文博は、現地調査を通して有応公を13種類に分類する。その分類には明確な基準があるわけではないが、有応公として祀られる死者の多様性をよく示している。列記すると①野墓有応公②水流有応公③戦亡有応公④成仁有応公⑤殉職有応公⑥車禍有応公⑦田頭有応公⑧団仔有応公⑨女娘有応媽⑩外人有応公<sup>1)</sup>⑪発財有応公⑫牲畜有応公⑬縹緲有応公である。このうち①野墓有応公が最も多い。これは、「枯骨」つまり供養されること無く打ち捨てられていた骨が祀られるケースである。以外には、水死者、戦死者、自殺者、殉職者、交通事故死者、農業や土地と関連するもの、子供の死者、女性、外国人、財をもたらすもの、動物と続く。そして、最も特徴的なのは、最後の縹緲有応公である。これは廟や祠を持たずまた像もない正に漂う孤魂野鬼である。この神像や牌などの実体を持たない縹緲有応公は、人々の間で好兄弟あるいは好兄弟伯仔と呼ばれ、陰界と陽界の間を漂う存在と説明がされている。これ以外のものは、廟は持たなくともより小規模な祠に納められ、像という形を伴って崇拝の対象となっている(黄 1992:184-196)。世を移ろう実体を持たない靈魂全体が「鬼」「好兄弟」とする考えを入れれば、これらは死後の人が取る最も基本的な姿といえる。また、多くの「鬼」の存在は、人の死を巡る状況が非常に多様であることを意味している。さらに農業社会であった漢民族社会を表している田頭有応公や、水流有応公のように水域と他界とのつながりを強くうかがわせるものがあるように、人の生活環境との結びつきが映し出されるものもある。

次に「鬼」その別称である「好兄弟」として無縁死者を崇める点について、筆者が調査を継続している台湾東海岸と、閩南民俗を共通する福建沿岸のケースを具体的に見ておきたい。そして、靈的存在を骨に重ねるその考え方に注目する。これに関連して人類学者の志賀市子は、靈魂が無縁死者である鬼から畏敬の対象である神にもなる理由として、漢民族社会の中に「骨」に対する信仰がある点を重視している(志賀2012: 106-107)。

## II 台湾東海岸および福建沿岸における「好兄弟」：水と陸との間で

筆者が主たる調査地とする台湾東海岸に位置するS町は、太平洋を臨む地にあり、1921年に行政機関が置かれ、1932年に漁港が築かれたことで周辺地域の中心地となった。戦後、黒潮が流れる太平洋を漁場とする漁業地として発展した。1990年代以降は、中央政府のテコ入れもあって観光産業が地域産業を支えている。また、町の人口の約半分が閩南系を中心とした漢民族であり、港を中心とした市街地に多く暮らしている。他方、先住民族アミの集落が点在しており、町は漢民族との混住地域となっている。

町内には、道教系の神々が祀られた宗教施設である廟や祠が多くある。漁港の側の小高い場所に萬善爺の廟が建てられている。その中を伺うと、主神である萬善爺公が置かれている。萬善爺公は王爺<sup>オンヤ</sup>(ong-ia)の一つである。副神として、大衆爺と有応公が祀られている。これら3つの神はいずれも陰神に属している。廟内左の小さな建物の中には無縁死者であること指す言葉(「本境無祀男女善縁等衆之神主」)が刻まれた碑があるが、そこに神像は置かれていない。右側には地藏王菩薩の碑がある。町の人々によれば、戦前より無縁死者を祀る祠が、同じ場所に立っていたという。1956年頃この地の有力者が、台湾南部の都市である台南から萬善爺の分身を持ってきて、この地に廟を建てた。現在の建物は1988年にできたもので、2001年に訪ねた際の説明では、

海で死んだ人の骨を祀っている。毎年旧暦6月16日の有応公、8月24日の萬善爺公、10月22日の大衆爺公の誕生日にそれぞれ祭祀が行われる。また、廟左にある建物には身寄りのない日本人の骨が甕に入れられ一緒に収められているということであった。そして、S町の漁民は、旧暦7月になると萬善廟で無縁死者の供養儀礼である「普渡」を行っている。2017年現在、経費は漁業協同組合を介して集められている。これまでの調査では、萬善爺とは「好兄弟である」「好兄弟の頭である」「親戚のいないもの、名前のないもの」といった無縁死者の靈魂とする説明がある。一方、萬善爺公は王爺の一つであって単なる「鬼」とは異なり神であるという解釈も存在する。住民からのこうした解釈から、前述した「神」「鬼」「祖先」を揺れ動く漢民族社会における靈魂観を確認することが出来る。

また、かつてS町の漁民の間では、商店同様に船で<sup>ツォグエー</sup>做牙(choe-ge)と呼ばれる祭祀が行われていた。これは、旧暦2日と16日に「好兄弟」に供物(豚、鶏、魚)を供えてデッキの前方で拝むもので、海で死んだ人の霊を慰める意味があるという<sup>3)</sup>。ただし最近は行われることが少なく、冬季のカジキ突棒漁の期間だけ行う船があるにすぎない。なお、船員の中で身内に不幸があると、漁に影響すると考えられており、大きな金紙を焼いてその煙で船を浄める。

また、S町の漁民は水死体は「好兄弟」であるという説明をする。そして、本来船に乗ることが出来ないと言われていた靈魂としての「好兄弟」が、船に取りつくことが不漁の原因ともされ、漁が芳しくない時はこれを祓う。だが、水死体を作法に基づいて船に上げ供養することで、豊漁がもたらされたというエピソードも聞かれる<sup>4)</sup>。

海に面した地にあるS町では、水難死者の中で身元が分からないものが萬善爺廟に祀られている。だが、正確には「本境無祀男女善縁等衆之神主」の碑の台座に無縁死者の骨が収められている。無縁死者の靈魂は、神である萬善爺公とは、別に祀られていると考えられる。そして、漁民にとって海で水死体に出会うということは、必ずしも頻繁に起こることではないが決して稀ではなく、また、漁の成否を左右する存在としての「好兄弟」は身近な存在といえる。陸域と水域が接する水際で生活する彼らにとって、「好兄弟」「鬼」は関心が集まる存在である。ここで、同じ水際に暮らし、閩南民俗を共通している福建沿岸部における「好兄弟」について以下に紹介していきたい。

福建省の沿岸地域の漁村には陰公廟が点在しており、その中には<sup>イムコンペー</sup>「陰公伯」(im-kon-peh)と呼ばれる神が祀られている。筆者は、2015～2017年の間に計3回福建省の沿海部で予備的な現地調査を実施した。この時泉州市、晋江市、石獅市、惠安県崇武鎮でこの無縁死者の靈魂を祀る祠を訪れた。「陰公伯」は、人々からは水難死した者の「好兄弟」であると説明される。そして彼らが実際に祭祀する対象は骨である。人骨については細長く口の狭い甕の中に収められ、紅い布で封がされている。この点は、中国南東部から台湾にかけて広く調査を行い、無縁死者の供養について考察した志賀の報告と同様である。志賀は、この中で調査対象地域が、過去災害や戦乱に見舞われたことによって多くの死者が出ている点を明らかとし、住民にとって無縁死者の遺骨がある意味身近であり、これを集めて供養することが盛んであることについて論じた(志賀2012)。また、閩東民俗を共通する台湾の離島馬祖や中国浙江沿海の島嶼に認められる媽祖廟の建立について、台湾の人類学者である林美容と陳緯華は島という地理的条件と漁業という危険で不安定な住民の

生業形態との深い結びつきを挙げている。つまり、「浮屍立廟」(陰である水死体を以て陽である神として廟を建てること)が、これらの辺境の小さな島々で共通して認められる点を、水死体に対する共感から紐解けるとした(林・陳 2004)。志賀の指摘については歴史的経緯が、そして林と陳の主張では地理的条件と生業の特性が、住民の間で広く無縁死者供養を行う理由として重視されている。筆者が訪れた福建省沿岸地域は、台湾漢民族と閩南民俗を共通すると考えられている。この地域も大量死を巡る歴史的経緯を持っている。それは倭寇の襲来である。閩南沿海地域において、旧暦7月に行われる「七月普渡」は一般に行われる年中行事の一つである。そして、『晋江市志』にはこれが行われる理由として倭寇の襲来が記されている。倭寇襲来により、多くの人々が亡くなったためその霊を慰めることを理由に旧暦7月の普渡が行われようになったと解釈されている(晋江市地方志編纂委員会1994:1347)。

一方、恵安県崇武鎮の漁村を調査した蔡永哲の報告には、「頭目宮」という名称で水難死した無縁死者についての記録がある。これによると「頭目宮」とは、海上で発見される死体であると書かれている。そして、漁民の習慣では、死体を見つけたら、必ず作業をやめて港に戻ってこれを埋葬しなければならず、砂浜の上のあちこちにこの類の神霊を専らに祀る小さな祠がある。「頭目宮」は、「人客」「好兄弟」とも称され、漁民は頭目宮が人に庇護を与えるために姿を見せられていると考えており、必ずきちんと奉祀するという。また、暖かく風が穏やかな時に、海面に油が流れ、その周りつき出たところが色鮮やかで輪のような光があると、死体が浮いていて、水の色は黒く青くなっており、簡単に見分け死体を見つけられるとも記されている(蔡1997:159)。

筆者が訪れた崇武鎮G村の漁民も、海に出ている時に水死体を発見したら必ずこれを拾い上げなければならないと考えていた。この点は、閩南系漢民族の漁民を対象に台湾で実施した調査でも同様であった。台東県S町の閩南系漢民族漁民の説明でも、水難死者をきちんと扱えば豊漁がもたらされる。そして、身元が分からない水難死者は骨にして廟に入れられている。

この中国福建での調査において、多くの動物の骨が「好兄弟」として祀られていることに気づいた。次にこの動物骨を「好兄弟」として祀る習俗に着目し、その存在についての理解を深める手がかりを得たい。漢民族社会で死者の靈魂を対象に「神」「鬼」「祖先」というカテゴリーを持つ靈魂観が存在する中、動物骨を「好兄弟」(鬼)また「陰公伯」(神)と見なす行為を取り上げることで、「鬼」に対する理解を新たに確認することが出来ると考えている。

### Ⅲ 動物骨を「好兄弟」とすることについて

福建省南部および広東省北部の無縁死者祭祀について研究する志賀(2012)は、調査した各地では土中より多くの人骨が見つかることを指摘している。これは、19世紀にこれらの地域で起こった争いや伝染病により多くの人々が亡くなったことに起因するという。そして、台湾においては、清朝は「三年一小乱、五年一大乱」と呼ばれるように人々の衝突が多くあったことが、無縁死者の靈魂を祀ることと関連が深い。さて、筆者が中国福建において調査を試みたのは閩南地域であるが、ここでは倭寇の襲来が大量死をもたらしたと考えられている。こうした大量死を生んだ歴史が、住民による無縁死者供養を手厚く行う習俗と密接に繋がっていると思われる。だが、筆者が閩南漁村を調査する中で観察した動物骨を「好兄弟」として祀る習俗を見ていると、また別

の視点から「好兄弟」(鬼)という存在そのものに関する理解を深めることが出来るのではないかと考える。そこで、ここではその手始めに動物骨を「好兄弟」として祀る点について紹介しておきたい。

### Ⅲ-1 動物骨と「好兄弟」

前出の曾景来が著わした『台湾宗教と迷信陋習』に収められている表には、計78の「主たる有応公廟」が挙げられている。そのほとんどに人骨が収められているとあるが、中に「犬ノ白骨」を祀った北港街の廟が記されている(曾1995(1939):89-90)。そして、こうした動物骨を祀った廟について、「又有応公は人鬼に限らず他の動物の霊或は骨を指して称する場合もあり、或は只抽象的に一般の孤魂を有応公と称することもある」(曾 1995(1939):92)と説明されており、有応公が動物を含む靈魂そして骨を指すことが記されている。これは、黄文博が動物骨を有応公として祀るケースを「牲畜有応公」と分類紹介していることにも合致する。この「牲畜有応公」として、牛の足の骨が主神として祀られている例が挙げられている(黄 1992:191)。「牲畜」という中国語は家畜を意味する。ここでは牛や犬、猫そして豚が有応公とされている。つまり、日常生活の中で非常に身近な動物が対象となっている。日常的に関わる動物と人の親密な関係が、骨を祀る行為という形を取って現れているとあってよいだろう。また、これらが靈異を示したことで祀られるようになる経緯が存在していることから、ある1頭1匹が個別に神格化していると考えられる。一方、前出の志賀(2012)には、「漁民が海で引き揚げた水死体を祀った墓地や祠」の一つとして、福建省漳州市東山島の「万福公」が事例として取り上げられている。この地に4か所存在する万福公の内の一つである、「銅陵万福公」について、志賀が2011年春に訪れたその様子は「金井(筆者注:骨を納める大きな穴の意)の周囲に金斗や人間の骨の一部や動物の白骨が入った大きなビニール袋がいくつも置かれていた。地元の人々の話では、漁に出て、網にひっかかった骨があると、持ち帰って万福公に納める。漁師たちは頻繁に万福公にお参りし、航海の安全や豊漁を祈願するという」とある(志賀2012:64-65)。ここから中国福建では個別のある動物ではなく、多くの骨が集合的に祭祀の対象となっていることが分かる。

筆者が訪れた福建南部の漁村(4か所)の陰公廟、萬陰公、頭目宮などと呼ばれる廟や祠は、すべて海岸線の側や海を臨む小高い丘の上であり、人骨よりも鯨やサメを始めとする大型の海洋生物の骨や陸上動物の骨が圧倒的に多く安置されていた(写真1)。動物骨は、線香や紙銭と共に紅いビニール袋に入れられ、無造作に積み上げられている。またある場所では、袋に入らない大きな骨が



写真1 海を臨む好兄弟の祠 (2017年3月)



写真2 石獅市S村の好兄弟である動物骨 (2017年3月)

野ざらしになっているケースもある(写真2)。そして、建物の中では人骨と動物骨とが明確に分けて安置されている。

### Ⅲ-1-1 石獅市S村の萬陰祠

2017年3月に福建省石獅市S村の海に近い小高い丘にある、花崗岩の石を積み上げ作られた萬陰祠を訪れた際、一人の女性が供物を供えていた。彼女は、夫が漁師で船が港に戻ってきたため、航海の安全と豊漁を感謝するために来たのだという。蠟燭が灯され、線香が捧げられており、調理された鶏肉やカニ、野菜を使った数種類の料理を持ってきて、廟の中にある碑の前にある台の上に皿を並べ拝み終えたところであった。供物は、生きている人が食するものと同じように調理されていなければならない、7種類以上準備するのだという。帰港時だけではなく、出港時も航海の安全と豊漁を願って祈りを捧げ、その他には除夕、清明(前後の10日)、中元、端午の時に米飯、果物を家から持って来て拝むという説明であった。そして、中元普渡の際に、集められ好兄弟となっている動物骨は、焼かれるのだという。

碑には「東海 厲魂神位」とあり、左横には媽祖の神像と水仙王公・王媽の碑、右横には「山海萬\*\*」の碑が置かれていた。そして、ここには骨は置かれていない。その隣りに「藏骸室」と書かれた部屋があり、袋に入れられた動物骨や甕に入れられた人骨がここに安置されている。ここでは、「平安發財」と書かれた金紙と経紙(あの世で必要とされる生活用品が印刷されている)が甕の側に置かれていた。また、この祠は墓地の中にあり、近くには亀甲墓が並んでいる。人家から離れたところにある墓地であり、かつ海に近い場所が選ばれて建てられているこの萬陰祠は、あの世とこの世をつなぐ位置に置かれているのである。

『石獅市志』には、この地が伝統的に網漁が盛んであると記されている。石獅市沿岸の海は深度が約60メートルと浅く、いわゆる閩中漁場南部に当たる。宋代より定置網を使った漁業が行われ、明代には浙江省、清代初めにはその更に北側へと漁場を広げて主に舟山漁場で延縄、曳網、流刺網を用いた漁が行われていた。アヘン戦争の後、特に曳網漁が発展した。その後、1931年までに網を用いた漁は近海から台湾海峡に広がっている。1937年から1945年の日本軍による侵攻の期間、そして1945年から1949年に至る国民党と共産党の争いの中で漁業は影響を受けて大きく停滞するが、その後回復する。刺網漁、巻網、曳網漁が1980年代よりその規模が大きくなりまたモータを用いるなどの変化がある。そして、漁船についても1985年に鋼鉄製の船が初めて作られ、1990年代以降その普及は早かった。こうした技術の変化は、より大きな網をより遠くで用いることを可能にする。石獅市S村では1972年より定置網漁が不調となり、曳網漁(トロール)への転換が始まり、1985年に鋼鉄製漁船が導入されてからはこれが中心となっている(石獅市地方志編纂委員会 1998:251-263)。

こうした変化の中で、石獅市沿岸では、今船から袋状になった網を降ろして曳くトロール漁の漁船が多い。この漁法では、海底にある様々なものを漁獲物と共に引き上げてしまう。この時に海に沈んでいる骨が網にかかるのである<sup>5)</sup>。

### Ⅲ -1-2 恵安県崇武鎮の「頭目宮」

蔡 (1997) が取り上げた崇武鎮にある別の漁村、G村で筆者が訪れた頭目宮<sup>6)</sup>は、石で作られた小さな祠で、内部そして周辺に紅いビニール袋に入った骨が線香や紙銭と共にあるいは骨がむき出しになった状態で置かれていた (写真3)。頭目宮の祠は、かつて村の漁港周辺に多く点在していたという。港の改修拡張を契機として、いくつかの祠はまとめられる形で規模の大きな「聚聖廟」となっている (写真4)。その横にもやはり紅いビニール袋に入れられた骨が置かれており、さらに裏には屋根に覆われた空間に同じく骨が安置されていた。なお、その多くは動物骨で、人骨は甕の中に置かれ、紅い布で口が塞がれている<sup>7)</sup>。また、石獅市S村の萬陰公と同様に集められた動物骨は年に一度の普渡の際に燃やされてしまう。



写真3 崇武鎮の「頭目宮」 (2017年3月)



写真4 崇武鎮の「聚聖廟」 (2017年3月)

筆者がここで行った聞き取り調査では、「頭目」とは「浮屍」(水死体) のことであるという説明を受けた。そして、旧暦7月15日に中元普渡を行いその時に人々が集まって「頭目」を拝み、線香をあげるのだという。「聚聖廟」も水死者を納めた施設とされている。これに関連して『崇武大岞村調査』(1990) では、

「聚聖廟は、新港の東南にある防波堤の南端にある三嶼礁の岩の上に建っている。聚聖とは海上の様々な神の集まりを意味し、人々は元々の頭目宮がバラバラに雑然としていたことを思い、古く荒れていたことに耐えられず、このため32艘の船からの寄付 (各艘100元前後) によりこの廟を建てた。1988年初めに工事を始め、同年の8月にはほぼ完成し、それぞれの頭目宮に供えられていた魂を集めて祭祀をした。

聚聖廟の作りはある程度精緻であり、廟の中には聚聖公の神位が設けられ、像はなく、香がたかれる机にかけられた布には「聚聖公英灵护海疆」(聚聖公の英霊が海を護る) と書かれている。主室の後ろには小さな部屋があり、たくさんの頭目公の「皇金」が置かれている。この場所は重要な宗教活動の場でもあり、毎年普渡の時にいつもここで祭祀儀礼が行われる」(陳・石 1990: 229)。

と記録されている。そして、この頭目宮に集められている魂は、実際には骨の形で実体化している。それも動物の骨が多くを占めている。これについてG村の元漁師(70歳代)によると、この動物骨が拾い上げられるケースが近年増えているようである。

「近年、漁は安全になって上がる死体は減っており、動物が多い。海で生活をしている地域にはどこでもあることだと思う。人骨と動物骨は分けて扱わなければならない。中元の時、船主は線香・供物をささげる。80年代、頭目公の祠は港の真ん中に位置した。「怖いところ」である。頭目公は、港を広げるのに伴い、元の場所から現在の場所に移した。それまでは砂浜だった。K村は、岩礁であった。港が出来てから海底が泥になってしまったが、それまでは潮が引くと砂浜になった」

また、「聚」とは、「雑」「什」という意味がある。これを踏まえるなら、「聚聖」とは個別に認識されるものではなく集合的な無縁死者の霊魂と考えることが出来る。人の霊魂の中には、子孫とのつながりにおいて祖先となるような個別化した存在があるが、ここに祀られている霊魂はそうした生者との特定のつながりを持たない霊魂である。そこに近年、動物の骨の存在感が増しているのだ。

加えて同じく『崇武大岬村調査』(1990)によれば、海で拾われた人の遺体を「頭目公」と称してその骨を集め「頭目宮」と呼ぶ小さな祠に入れて祀っていることが以下のように記録されている。

「大岬村の海辺の砂浜にはたくさんの小さな石でできた廟があり、「頭目宮」と呼ばれている。村の南にある新港付近の砂浜の上に固まってあり、合わせて8座ある。その他の砂浜にも点在している。これは海に出て難にあったものを祭祀した廟である。

大岬村の人は、海上で亡くなった者の鬼魂は、生きている者の航海の安全と豊漁を守護する力を持ち、また漁民の命を脅かしそして不漁をもたらすことも出来ると信じている。このため、漁民は海の上で死体に出会ったりあるいは人骨やサメの骨を網に掛けると、皆、きちんと扱い、「頭目公」として大切に頭目宮の中に置いて恭しく祀る」(陳・石1990:229)。

無縁死者の白骨およびサメなどの動物骨が収められている「頭目宮」「聚聖廟」がある恵安県沿岸部では、主に網を用いた漁が営まれてきた。先の石獅市同様に台湾海峡を臨む沿海部にあり、その水深度は浅くそして砂泥質の海底が広がっている。例えば、1931年12月に行われた漁村調査『福建省漁業調査報告』にある記録によると、恵安県の「風俗」について廈門の各県と似通っており、町部は周辺に比べて開化しているが、漁民たちは昔ながら習慣深く信じ、迷信深いとある。そして、漁場として沿海部だけでなくタチウオ漁のために浙江省舟山群島に赴くことが記されている。ここにあるG村の漁業については、二艘囲網漁(5月-9月、鮫、イワシ、黄花魚)、二艘曳網漁(8-4月(イワシ、鮫、タイ、ウナギ、黄花魚)、イカ釣り漁(3-5月、イカ)、タチウオ釣漁(9月~2月、舟山群島)、またG村の漁業については流し網漁(周年)、釣り漁(周年)、カニ流し網漁(12-2月)が挙げられており、網漁が盛んに行われている様子が分かる。そして、沿海部の漁場の特徴として浅い砂泥質の海底が広がっているとある(陳1935:不明)。

さらに、漁業の機械化が進んでいくにつれ、その漁場はより岸から離れていく。1960年代には帆船から機帆船へと変わっていった。動力が用いられ、船体も大きくなるにつれて動力が主となり、帆が補助的な物へと変わった。250馬力の延縄釣機帆船だと、100トン前後の重さに乗せることが出来て、10艘ほどの小舟を乗せ、集魚灯を用いた巻き網や流し網での漁を行うことも出来る。

270馬力の集魚灯を用いた機帆船だと90～120トン載せることが可能で、船体の前後左右の長さの差が小さくて甲板の面積が広く、喫水線から甲板までの高さが低く、一般的に3基のディーゼルエンジンと発電機による大きな集魚灯のクレーンがついている。この他、少なくない数の小型エンジン付き漁船もあり、10トン前後の積載量で、4から6名の乗組員が乗って早朝出港夜遅く帰港する近海での釣り漁をしている。崇武鎮の漁船の生産道具は、近年次第に現代化している（陳・蔡 1990：95）。このように、廈門の北にある惠安県においても石獅市と同じように浅い海が広がる中で網漁を盛んに行ってきた上に、大型機械化する中で台湾海峡にまで漁場は広がっている。それを踏まえれば、話者の語る近年増えてきたという動物骨を好兄弟として祭祀施設に入れて供養することと、漁業の近代化には関連が認められるだろう。

### Ⅲ -1-3 泉州市 X 地区の「陰公伯」

この他、泉州市近郊 X 地区にある「陰公伯」の祠では、かつて漁師であった男性（70歳代）より、漁に出て骨を拾い上げる行為について、次のような語りがあった。

「海底には骨がたくさんある。船長（船老大）が若い乗組員に捨ててはいけないと教える。金紙にくるんで線香をあげる。「陰公伯」、かつてはもう少し大きな建物だった。早朝に出港して昼に戻る日帰り漁。この周囲は以前、人家がなかった。20年ほど前から人家があるようになった。子供のころは、陰公伯は以前は怖いところだった」

このように、漁撈と拾い上げた骨を陰公伯として祭祀する行為には密接なつながりがある。網に魚と共にかかった骨は、ある種の霊力を備えていると認識されている。また、それを人家から離れたところに安置することから、骨の持つ力が人にとって良い作用をもたらすとは考えられていない。一方、漁の安全や成功を与えてくれる存在でもある。この骨を間近にみると、そのほとんどはイルカやサメ、そして鹿などの動物の骨であった。先の2地点と同様に、海底深度の浅い海域を主な漁場として網漁を行ってきたことが、彼らに骨との接点を生んでいると考えることが出来る。

### Ⅲ -2 好兄弟となる動物について

この様に福建沿岸では、動物骨が「好兄弟」として祀られている。観察では、イルカやクジラなどの海獣に加え、サメと思われる骨もあった。このサメについて、惠安県崇武鎮で「サメの経済価値は高かった。1950年頃までは台湾海峡で「放大昆」（延縄漁の意）をして取っていた。国共が厳しくなって入れなくなった。その後は、1か月前後の短い漁がおこなわれ、1955年以降一部開放されて台湾海峡に入れるようになったが台湾に近づくことは許されなかった」と説明を受けた。サメ類は崇武鎮の漁業において重要な漁獲物であった。また、先に引用した「（崇武鎮の）大岞村の人は、海上で亡くなった者の鬼魂は、生きている者の航海の安全と豊漁を守護する力を持ち、また漁民の命を脅かしそして不漁をもたらすことも出来ると信じている。このため、漁民は海の上で死体に出会ったりあるいは人骨やサメの骨を網に掛けると、皆、きちんと扱い、「頭目公」として大切に頭目宮の中に置いて恭しく祀る」（陳・石1990：229）という報告では、頭目

宮となっているサメを特に言及している。また、「大冨の人は好んでサメを捕まえるが、しかし「哈仔鯊」<sup>8)</sup>を凶悪な魚と見ており、これに対しては畏懼心を持ってもいる。「哈仔鯊」の骨を頭目公として見ており、これらの霊と海難者の霊とを同じものとして見なしている。このほか、クジラも「哈仔鯊」と同じように向き合っており、海上で鯨に出会った時には、これに向かって両手を挙げて跪いて拝礼することさえある」(陳・石 1990:231)という記述もあり、サメに加えてクジラが漁民たちの間で特別視されていることが分かる。ただし、この報告内容からはクジラの骨が「好兄弟」として扱われるのかは定かではない。

このように漁で拾われ好兄弟として祀られる動物骨の中には、漁師の中でその種が特定され認識されているものがあるようだ。

### Ⅲ-3 小括

福建沿海部の漁民にとって、海で骨を拾い上げそれを祭祀する行為は身近である。先ほどの崇武鎮の話者の語りには「海で生活をしている地域にはどこでもあることだと思う」という声があった。そして、技術革新が進む漁業の中で、漁の際に骨と接する機会は最近になってから特に増えていることがうかがわれる。この時の骨は多くが動物の骨である。こうして見ると、いわば近代化が前近代の習俗を盛んにしているかのようである。漁船が大型化し漁に出る範囲が拡大し、用いるトロール漁の網も大きく丈夫になったために、動物(骨)がそれも大きなものが引き上げられるようになってきている。動物が人の領域に入り込み存在感が高まっている。

「好兄弟」(鬼)を表すモノが骨である。本来鬼は、祖先のように個別的な霊魂ではない。黄文博(1998)の分類にある縹緗有応公の説明にあるように、個々の霊魂の集合体であって、ある実体を伴わない。伴った場合は、「好兄弟」(鬼)の集合体として神格化して「有応公」などの神になる。この時、崇拝の対象となる物質として骨が存在している。人は、骨を通して陰界とのつながりが持てるのである。この時、身近な動物の骨は、人骨に似た扱いを受けて「好兄弟」と称され、共に神格化し神(陰公伯や聚聖公)となっていた。

だが、人骨と動物骨は共に「好兄弟」となるが、決して同じではない。甕に入れられる人骨と、ビニール袋に入れられる動物骨は、安置されるその方法もそして置かれる場所も明確に分けられていた。さらに、人骨は甕に入れ廟内に安置されて漁の合間そして「普渡」という形でこの世での供養を受け続けるが、動物骨は普渡の際にまとめて焼かれてしまう。こうして見ると、海からやって来る動物骨は、一時的に神の位置に入れられ、その後は人に手によって実体のない「鬼」へと移されているのである。

## Ⅳ 閩南民俗における「鬼」に関する予備的考察：漁民社会の「好兄弟」から

漢民族社会における骨は、一般的に畏怖の対象である。さらに骨は父からそして血肉は母から受け継がれるとされ、骨の存在とこれに対する儀礼は父—子関係の連続つまり父系的親族の継承を象徴している。祖先とのつながりを示す骨は、親族としての個別性を備えているといえるだろう。しかし、無縁死者の人骨はこうした個別性を失っている。人類学者の渡邊欣雄は、台湾漢民

族における「鬼」について「祀るべき特定の人間がいないこと、いいかえれば祀るべき人間が特定できない存在であることを指している」と指摘する(渡邊1991:185)。これを換言すれば、つまり誰にとっても祀ることが出来る存在とも言えるだろう。このため、旧暦7月に行われる普渡では、あまねく人々が「鬼」を祀ることが出来る。つまり、誰とでもつながらる可能性を持つのが「鬼」である。この点について、渡邊は「鬼は…アナーキカルな存在であり、秩序に飢えるもの(パウパー)として絶対的な存在なのではないか」と述べている(渡邊1991:190)。

「鬼」「好兄弟」が、様々な秩序を求める存在であるがため、人の霊魂であるはずのこれらに動物の霊魂を組み入れることを可能にしている。ただし、動物の霊魂の場合、当然祖先という秩序に入れられることはない。祖先とはある意味で人の側の存在である。この段階では人と非一人は明確に区別される。

また、「骨」が霊的存在と重なるという認識が、水難死者の人骨と拾い上げられた動物骨とを同じように「好兄弟」とする閩南系漢族漁民の霊魂観の底辺にも認められる。そして、台湾の有応公の中に動物の骨が祀られるケースがあり、福建の頭目宮や陰公廟に好兄弟として動物骨が多く収められてもいるように、動物の霊魂が神的存在となって漢民族社会が持つ霊的存在の体系に接近している。だがこの段階でも、霊的存在を備えた骨として同類ではあっても人と動物とが等号で結ばれることはない。「好兄弟」として同じでも、人と動物のそれは同じようには扱われない点からそれが理解できる。骨は、死後も残るものとして漢民族社会に存在している。このため、台湾でも福建でも人骨は廟の中で神として信仰の対象となり続けることが出来る。黄文博(1998)にあった「牲畜有応公」のように台湾では人のそれとは別に神格化し祭祀を受け続けているが、福建で増えている「好兄弟」となった動物骨は普渡の際に焼かれてしまう。台湾と比べ、福建の「好兄弟」となった動物骨は集合的でより移ろいやすい存在である。動物を人間を中心とした霊魂観の中に入れてどのように扱っているのかについては、まだ事例そのものが少ないが、非一人をどのようにして信仰の対象とするのかを検討することで、漢民族社会の宗教実践が持つとされる柔軟性を理解する一助になるのではないかと考える<sup>9)</sup>。

### 【補遺】

台湾では中国語(華語)が、中国でもやはり中国語(普通話)が公用語として通用している。そして、閩南系漢民族が暮らす台湾および福建では閩南語が、日常的に人々によって話されている。ただし、それぞれの地域で使われている閩南語には差異があり、特に台湾では「台湾語(台語)」と呼んでいる。閩南語の表記については、漢字にルビを振り、教会式ローマ字を付している。現地調査においては、中国語を主に用いたが、合わせて閩南語も使用した。台湾における調査は1993年より継続的に行っている。中国福建(泉州市、晋江市、石獅市、惠安崇武鎮)での調査は2015年3月、2016年3月、2017年3月にそれぞれ短期間実施した。

本論文は、JSPS科学研究費補助基金25370952および16K03235による調査研究の一部である。現地調査の実施においては、台湾八斗子漁村文物館の許焜山氏、中国泉州海上史交通博物館の成冬冬氏より格別のご助力を賜った。また、陳子栄主編『福建省漁業調査報告』(1935)の閲覧複写にあたり国立台湾図書館を利用した。関係者各機関に深く感謝申し上げる。

注

- 1) 「外人有応公」とは、台湾の外から来た人物を死後神として祀っているものを指している。黄(1992)には、オランダ統治期や日本統治期の死者がその対象となり神として祀られたものが分類されている。日本統治と関連する台湾の神については、近年植民地主義的人類学研究の立場からの研究がある(例えば、三尾 2017; 林他 2017)。
- 2) 王爺とは、集合的な神であり、非業の死を遂げた進士たちがその後神として祀られたものとされ、また町から疫病などの禍から守る神とされている。台湾各地では「王船」と呼ばれる船を作り、火をつけて海に流す。
- 3) 船には「船神」があり、通常操舵室に廟でもらってきた神像の写真、旗(令旗)、線香をたく香炉が置かれている。媽祖、土地公、閻帝など船長が信仰する神が祀られている。また、船前方にあるロープを縛る柱を船の頭に見立て、そこを神聖視する。
- 4) 日本民俗学では、日本の漁民社会の類似した習俗を「エビス神信仰」と呼んできた。海上で発見した水死体は必ず作法に従って引揚げなければならない、それが幸運(豊漁)をもたらすとされ、従わなければ不幸(不漁など)の原因となるとされる。こうした水死者に対する畏怖を始めとする漁民社会の習俗は、東アジア沿海地域に共通するものがあり、研究者の注目を集めてきた。比較的近年の代表的なものとして、下野(1989)、野村編(2015)がある。いずれも前近代から続く基層文化に着目した議論が展開されている。また、国境によって分け閉ざされた近代以降の国民国家を前提としたこれまでの研究に疑問を投げかけるものでもある(cf. 原尻・金(2015))。筆者としては、国境を挟んで向かい合う境域に暮らす人々の行き来の変遷を視野に入れた形での研究を目指したいと考えている。
- 5) 石獅・晋江では、1990年代末に「海峡人」という化石人骨の調査が行われた。陰公廟に好兄弟として積まれた骨を調べたところ、人骨の他、象や牛の化石が海底から見つかった。そして、近年その数量は増加しているという。その経緯についてはインターネット記事「海都深読」124期に掲載の「『沈東京 浮福建』再探秘」(2017年5月15日)を参照。
- 6) そもそも水死者をなぜ「頭目」と呼ぶのかは不明である。
- 7) 案内してくれた元漁師の男性(70歳代)と現役漁師の男性(30歳代)は、筆者と共に廟の前まで来たが、ビニール袋に入った動物骨や裏手にある甕に入れて安置された人骨には近づこうとしなかった。骨に対する畏怖が理由として考えられる。一方、泉州市に近いX村の元漁師の男性(70歳代)は、子供のころは怖いところであったと話ながらも、廟の中に一緒に入り、うず高く重なる袋に入った骨の前にして筆者のインタビューに答えた。
- 8) 「哈仔鯊」がどのようなサメなのかは分からない。なお「鯊」はサメ類を指す言葉である。
- 9) 三尾は、「宗教実践という観点からみれば、漢人のそれは、包容力、多元性にこそ特徴があると言える」と述べ(2017:15)、漢民族社会の宗教観が持つ柔軟性を指摘したうえで、台湾の漢民族が経験した日本統治期に由来する「日本神」について検討を加えている(三尾 2017)。この時には、儒教・仏教・道教が混淆する漢民族の民間信仰に様々な外来宗教が取り込まれている点が前提として挙げられているが、加えて「包容力」について理解を進める上で、非一人を対象とする宗教実践を検討する意義があるのではないだろうか。

【参考文献】

日本語

- 志賀市子(2012)『〈神〉と〈鬼〉の間 中国東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』風響社。
- 下野敏見(1989)『東シナ海文化圏の民俗：地域研究から比較民俗へ』未来社。
- 曾 景来(1995(1939))『台湾宗教と迷信陋習』台北：南天書局(復刻版)。
- 西村一之(2017)「移動・移住の経験と実践—東シナ海国境海域をゆきかう漁民たち」上水流久彦・村上和弘・西村一之編『境域の人類学：八重山・対馬にみる「越境」』、pp.41-74、風響社。
- 野村伸一編著(2015)『東アジア海域文化の生成と展開 〈東方地中海〉としての理解』風響社。
- 原尻英樹・金明美共編著(2015)『東シナ海域における朝鮮半島と日本列島—その基層文化と人々の生活』かんよう出版。
- 三尾裕子(1990)「『有応公』信仰に見る漢人の世界観」伊藤亜人編『民族文化の世界 上』小学館、pp.223-240。

- 三尾裕子 (2017) 「植民地経験、戦争経験を「飼いならす」—日本人を神に祀る信仰を事例に—」『日本台湾学会報』19: 14-28.
- 林美容・三尾裕子・劉智豪 (2017) 「田中綱常から田中將軍への人神変質—〈族群泯滅〉の民衆史学—」『日本台湾学会報』19: 50-70.
- 渡邊欣雄 (1991) 「鬼魂再考—民俗宗教理解のための試論」『漢民族の宗教 社会人類学的研究』、pp.153-193、第一書房.

中国語 (ピンイン順)

- 蔡永哲 (1997) 「崇武靖江村漁業習俗的特点」陳国強主編『惠安民族』、pp.156-163、厦門：厦門大学出版社.
- 陳国強・蔡永哲 主編 (1990) 『崇武人類学調査』福州：福建教育出版社.
- 陳国強・石奕龍 主編 (1990) 『崇武大岞村調査』福州：福建教育出版社.
- 陳子榮 主編 (1935) 『福建省漁業調査報告 (厦門大学理学院生物学系刊物第 2 卷)』厦門：厦門大学理学院生物学系.
- 黄文博 (1992) 「有求必応—台湾民間有応公信仰」『台湾冥魂伝奇』、pp.184-196、台北：台源出版.
- 林富士 (1995) 『孤魂與鬼雄の世界—北台湾的厲鬼信仰』台北：台北県立文化中心.
- 林美容・陳緯華 (2008) 「馬祖列島浮屍立廟研究：從馬港天后宮談起」『台湾人類学刊』6 (1):103-132.
- 晋江市地方志編纂委員会 (1994) 『晋江市志』上海：三聯書店.
- 石獅市地方志編纂委員会 (1998) 『石獅市志』北京：方志出版社.
- 西村一之 (2003) 「但願捕魚成功：由臺灣東部鏢旗魚觀其民俗」『台湾文献』54 (2)：97-112.

(英語)

- Jordan, K. David (1985(1966)) *Gods, Ghosts and Ancestors Folk religion in a Taiwanese Village*. Berkley and Los Angeles, California: California University Press.

インターネット記事

- 「「沈東京 浮福建」再探秘」『海都深読』124 期 (2017 年 5 月 15 日、『壹讀』に掲載) (<https://read01.com/KzgygN.html#.Wh-NsZW6yUk>) 2017 年 11 月 30 日最終閲覧.